様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520295
研究課題名（和文）　民話の芸術作品への変容とグローバル化：ブリテン諸島の「あざらし女」民話を中心に
研究課題名（英文）　Research on the Change of Folk Tales into Artistic Works and their Globalization
研究代表者
下楠昌哉（SHIMOKUSU MASAYA）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：90329532

研究成果の概要（和文）：
本研究の成果は、１）日本における、あざらし女を民話を基にした西洋の文芸作品の受容の過程と現状を海外に発信したこと、２）文学に現れた、ブリテン諸島における”mermaid”と日本における「人魚」の概念に関する比較研究を行ったこと、３）スコットランドのオークニー諸島と北アイルランドでフィールドワークによって実際に民話を収集したこと、４）松村みね子の翻訳作品を研究するにあたっての留意事項を明らかにしたこと、５）ジェイムズ・ジョイスの紀行文とアイルランドの民間伝承の関係性を検証したこと、６）日本、英国、アイルランドをつなぐ研究者間の連携を促進したこと、である。

研究成果の概要（英文）：
The accomplishments of this research project are as follows. 1) The researcher showed overseas scholars how Japan has accepted Western literary works based on “Seal Woman” folk tales. 2) The researcher compared the imagery of “mermaid” appearing in British and Irish literary works with that of *ningyo*, a general Japanese appellative for Western-style “mermaid.” 3) The researcher collected folk tales on the Seal Woman in the Orkney, Scotland and in Northern Ireland. 4) The researcher clarified what points researchers should pay attention to when dealing with Mineko Matsumura’s translations. 5) The researcher examined the relationship between James Joyce’s journalistic essay and Irish folklore. 6) The researcher tightened the connections of scholars among Japan, Great Britain, and Ireland.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英文学・民俗学・グローバリゼーション

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者自身の業績：
本研究代表者は「民話の芸術作品への変容

とグローバル化：ブリテン諸島の「あざらし女」民話を中心に」を開始するまで、主としてジェイムズ・ジョイスやブラム・ストーカーといった、英文学作家として分類されることの多いアイルランド系作家の文学作品について研究を続けてきた。同時に、平成 12 年 4 月から平成 20 年 3 月までの 8 年間、ブラジル人人口が全国最多で多文化共生都市を標榜する浜松市にある静岡文化芸術大学に勤務している間は、文化人類学者や歴史学者といった隣接諸分野の研究者と研究チームを組み、多文化主義についての研究を行なった。その過程において、社会学的アプローチやフィールドワークの手法、多文化主義とグローバリゼーションとの関係性などについて知見を得た。こうした研究環境の中から生まれたのが、下楠昌哉、『妖精のアイルランドー「取り替え子」の文学史』(2005)である。この研究業績は新書の形で出版され学術書の体裁をとってはいないが、国際アイルランド文学協会日本支部（IASIL JAPAN）および日本アイルランド協会の学会誌書評にとりあげられるなどし、大きな反響を得た。この研究では、民話や民間伝承が民族運動と深く結び付いていたアイルランド文学の諸作品の中の民話的要素を論じるにあたり、19 世紀のアイルランドのコミュニティの中での民話あり方から説き起こし、学術的に収集されて活字化された民話が、19 世紀末から 20 世紀初頭のアイルランドにゆかりある作家達の作品の中に、どのように遍く浸透していったかを示した。

（２）先行研究

今回の研究においては、国家の枠組みを越えてゆくような、民話に由来する言説や表象のネットワークの有り様を抉出することを試みた。研究を進めてゆくにあたって着目した民話、「あざらし女」の基本的な物語パターンは、毛皮を奪われたあざらし女が心ならずも人間と結婚するが、やがて毛皮を取り戻し海に帰ってゆく、というものである。このタイプの民話に関しては、先行研究としての関連書が英語圏でも日本でも出版されている。Ronald M. Rockley, *Grey Seal, Common Seal*(1966)は、1987 年に翻訳が日本で出版された。中心はあざらしの生態だが、あざらし女やあざらし人間の民話の様々な形態が紹介されている。あざらし女民話の本場スコットランドのオークニー諸島の民話を編纂した、Tom Muir, *The Mermaid Bride and Other Orkney Folk Tale* (1998)は、2004 年に翻訳が出た。学術書ではないが、Duncan Williamson の *Tales of the Seal People: Scottish Folk Tales* (2005)は、現代でも民話が人々の精神的安定に寄与しうる事例を序文に収めている。あざらしに関する民話をアイルランドとスコットランドに追ったルポルタージュの傑作 David Thomson, *The People of the Sea: Celtic Tales of the Seal-Folk* (1954)は、ノーベル賞詩人 Seamus Heaney の序文を付して 1996 年に再版された。バラッドに歌われたあざらし女の民話に着目した国内研究者には、名古屋短期大学井川恵理教授がいる。

あざらし女の民話はしばしば mermaid すなわち人魚の民話と同じ物語パターンを持ち、場合によってはあざらし女が mermaid と呼ばれる場合もある。日本における「人魚」のイメージに関する包括的書物としては、田辺悟『人魚』（2008）や吉岡郁夫『人魚の動物民俗誌』（1998）などがある。ただし、人魚とあざらし女の相関関係に着目した研究は、本研究以外には日本ではほとんど見られない。

２．研究の目的

（１）本研究の主な目的は、情報と資本と人がグローバルに交流する現代において、特定地域に口伝えられてきた民話が、様々な文化メディアに取り込まれ、芸術作品に変容して世界中に拡散しつつ、もともとその民話が語られてきた地域においても観光産業などと結び付いて新たな存在意義を獲得しているプロセスに着目し、その過程をはっきりと看取しうるようなケース・スタディを行なうことである。特定の民族や地域固有の文化の一様相とされた歴史を持つ民話が、文学や映画などのメディアと相互に関係を結びつつ、現代社会の中でどのようにそのありようを変えているのかを考察した。研究の題材としては、ブリテン本島の島嶼部やアイルランド沿岸部に多くみられる異類婚姻譚の「あざらし女（Seal Woman）」の民話に着目した。

（２）副次的な目的は二つ。ひとつは、海外に向けて研究成果の発表を行なう際、日本の現代の大衆文化と西欧の伝承文化の関係性について言及し、海外の研究者の日本の大衆文化への注意を促すこと。もうひとつは、国内に向けて研究成果の発表を行なう際、日本では半人半魚というイメージで固着している「人魚」に対応する”mermaid”という言葉がブリテン諸島の一部では「あざらし女」を指すことを強調し、”mermaid”という言葉の持つ多様性への認知を促すことであった

３．研究の方法

多国籍･超国籍企業によって経済活動がグローバルに展開され、高度に情報化された現代の社会においては、世界中の人々が、同一の情報を同時に共有しうる。こうした状況下

において、特定の地域において口伝えられてきた民話は、文学や映画をはじめとする各種文化メディアに取り込まれ、拡散し、その地域の人々の伝統的な想像力を世界中の人々に共有させるにいたっている。本研究においては、アイルランド沿岸やブリテン本島の島嶼部などにおいて長らく語られてきた「あざらし女」の民話に焦点を合わせ、上記のような状況をはっきりと例証する民話の現状とそれを取り込んだ言説・表象空間の広がりを描き出すことを試みた。

民話という民俗学的主題が文学作品や映像作品にどう取り込まれているのか、というオーソドックスな文学・文化研究と平行し、民話が実際に語られている現場においてフィールドワークを行い、民話の実例を収集しつつ、そうした民話がどのように世界の情報メディアネットワークの中を流通し、もともとの民話が語られる現場へどのような影響を与えるかを学際的に検証した。

平成 21 年度：

8 月 18 日～25 日までスコットランドのオークニー諸島でフィールドワークを行い、プロフェッショナルのストーリーテラーから実際にあざらし女の民話を収集し、所属の学術紀要に研究ノートとして発表した。論文ではなく研究ノートとしたのは、内容が学際的であるため既存の文学研究論文の形式に収まりきらなかったためである。7 月 28 日には、英国のグラスゴー大学で開催された国際アイルランド文学協会（IASIL）の大会で、大正期・昭和初期の歌人、松村みね子によるあざらし女をモチーフとした翻訳作品について研究発表を行った。

平成 22 年度：

8 月 12 日～15 日まで北アイルランド、コールレインでフィールドワークを行い、現地の歴史文化に造詣が深い人物からあざらし女の民話を収集した。この成果は、2 年の時間をかけて正統的な文学研究の成果とあわせ、研究論文として平成 23 年度に発表した。11 月 13 日には、英国のサンダーランド大学で開催された第 8 回 North East Irish Culture Network の大会において、前年の IASIL における発表をさらに発展させた内容の発表を行った。この発表を基にした論文は、グラスゴー大学 Willy Maley 博士とサンダーランド大学 Alison Younger 博士の出版プロジェクトに採用され、刊行予定である。平成 21 年度と 22 年度に松村みね子の翻訳作品に関する研究を深化させた結果、この題材を扱って研究する際に必要な留意点に気づいたため、研究ノートのかたちにまとめて発表した。

平成 23 年度：

アイルランド国立ゴールウェイ大学の Centre for Irish Studies から visiting scholar として招聘されたことを受け、センターにてアイルランド文学、アングロ＝アイリッシュ文学の研究者たちからの指導を受けつつ資料収集をし、研究をさらに深化させた。センターには 8 月 29 日～9 月 21 日まで滞在した。研究成果は、その年の 11 月 12 日に、英国のサンダーランド大学で開催された第 9 回 North East Irish Culture Network 大会において研究発表を行った。6 月 18 日にも日本ジェイムズ・ジョイス協会のシンポジウムにおいて、アイルランド民話に登場する幻の島が、ジョイスのジャーナリスティックな活動にどう活用されてイタリアに報道されたかを発表した。

４．研究成果

（１）日本におけるあざらし女を民話を基にした文芸作品の受容の過程と現状を海外に発信：

明治維新以来、近代国民国家の形成と西洋の列強に伍す体制を整えることは、新生日本政府の喫緊の課題であった。そうした状況において、文化・文芸関連の分野においても西洋から多くの作品が翻訳のかたちをとって日本に流入した。そうした流れのなかで、ヨーロッパの小国でイギリス帝国の一部であったアイルランドの文学は、大正から昭和初期において文人たちの間でブームとなった。海外の学会においては、日本文学を専門とする学会でない限り、上記のような基本的前提すら、研究者間に共有されていない。平成 21 年度の IASIL、および平成 22 年度の North East Irish Culture Network の大会における研究発表は、こうした前提を海外におけるアイルランド文学研究者に知らしめるに大きな役割を果たした。また、後者の発表で読まれたペーパーは、グラスゴー大学 Willy Maley 博士とサンダーランド大学 Alison Younger 博士の出版プロジェクトに採用されるに至り、今後書籍のかたちで恒久的に英語を主要使用言語とする研究者たちに、閲覧可能になる予定である。

この研究において中心に据えたのは、歌人の片山廣子こと松村みね子である。この歌人の大正から昭和初期にかけての活動の中では、アイルランド文学の翻訳の評価が高い。しかしながら、この訳者の翻訳で現代の日本で最もよく読まれているのは、スコットランドの作家フィオナ・マクラウド（Fiona Macleod もしくは William Sharp, 1855-1905）の翻訳である。結果、日本においては本国スコットランドでは比較的マイナーな存在であるマクラウドが、研究者や一

般読者の間で常に注目を集める存在となっている。日本におけるこうした現状は、この研究成果が発表されるまで、スコットランドにおいてはまったくと言っていいほど知られていなかった。こうした状況に対し、本研究代表者のグラスゴー大学における研究発表、さらにはグラスゴー大学所属の研究者の主催する出版プロジェクトへの参加が一石を投じたのは、間違いがない。

（２）文学に現れたブリテン諸島における”mermaid”と日本における「人魚」の概念に関する比較研究：

日本語において「人魚」の訳語が与えられている英語”mermaid”は、”sea”を指す接頭辞”mer-“と、”maid”という名詞の組み合わせである。したがって、この単語の字義通りの意味は「海の女」、というほどの意味となる。確かに、日本語の「人魚」という単語によって想起されるような半人半魚の想像上の動物が”mermaid”と呼ばれることは、ブリテン諸島でも多い。しかしながら、ブリテン諸島の民話、特にアイルランドの民話においては、あざらし女が”mermaid”と呼ばれたり、あるいはあざらし女の民話に典型的な形を持つ民話に半人半魚の”mermaid”が登場したりするような場合が多々ある。本研究では、ノーベル賞詩人シェイマス・ヒーニーとヌーラ・ニゴノールという 2 人のアイルランド詩人の作品において取り上げられた”mermaid”のモチーフに関して研究をし、アイルランドにおける民話を基にした彼らの詩においては、”mermaid”として表現される存在が、時にあざらし女であったり、時にあざらし女に深い関わりを持つことを明らかにした。その成果が、”Defining Mermaids: Irish Seal Woman Folk Tales, the Mermaid Poems of Seamus Heaney and Nuala Ní Dhomhnaill, and their Translation,” *Doshisha Literature*, Nos. 54 & 55, 2012, pp. 1-20 である。この論考では、さらにそれらの作品の日本語の翻訳作品についても研究を進め、現在出版されている翻訳の多くが、半人半魚の「人魚」のみを念頭に翻訳が行われていることを明らかにした。

この研究からわかることは、あざらし女が”mermaid”と呼ばれうる地域の民話や、それらを基にした詩や小説などの文芸作品を日本に紹介したり、翻訳したりする場合、押しなべてすべての”mermaid”という単語に「人魚」という訳語を適用しうるかどうか慎重に考える必要がある、ということである。そうした点について”Defining Mermaids”は、日本の学術界、出版界に対して警鐘を鳴らしたと言える。ただしこの論点については、”Selkies in Orkney: Storytelling and the Literary Imagination,” *Doshisha Literature*, Nos. 52 & 53, 2010, pp. 97-114 において、平成 22 年度にもすでにその主張の一部を提示している。この論考に対しては、『ヌーラ・ニゴノール詩集』（土曜美術社、2010）で”mermaid”を扱った詩を訳した池田寛子広島市立大学准教授から直接コメントをいただいた。

（３）フィールドワークによる民話の収集：

本研究は通常の文学研究と異なり民俗学的なフィールドワークの手法も含んだ学際的なものであるため、民話が語られている現場に赴き、実際に民話を収集するフィールドワークを行った。Seán Ó Súilleabhán, *The Handbook of Irish Folk Tale* に則り、情報提供者の氏名、住所、年齢を記録したうえで公表時にはそうした情報は公開せず、かつ民話を収集する際に情報提供者には記録した内容を学術研究に則って扱うことについて承諾を書面で得た。民話は IC レコーダーに録音したうえで研究代表者本人がテープ起こしをし、その内容を情報提供者本人に確認してもらったうえで、さらに内容を IC レコーダーで確認したうえで、情報提供者の語りを一語一語すべて再現した。これらは、民俗学の見地からも価値の高い成果である。民話の採集は、平成 21 年度はスコットランド、オークニー諸島で 8 月 20 日に、平成 22 年度は北アイルランド、コールレインで 8 月 13 日に行った。成果はそれぞれ、”Selkies in Orkney: Storytelling and the Literary Imagination,” *Doshisha Literature*, Nos. 52 & 53, 2010, pp. 99-103 と、Appendix in ”Defining Mermaids: Irish Seal Woman Folk Tales, the Mermaid Poems of Seamus Heaney and Nuala Ní Dhomhnaill, and their Translation,” *Doshisha Literature*, Nos. 54 & 55, 2012, pp. 16-20 で見ることができる。なお、これらの成果のうちの前者は、オークニー博物館員トム・ミュア（Tom Muir）氏によって、オークニー図書館および古文書館（the Orkney Library & Archive）のアーカイヴ部門に寄贈され、そこに収蔵されている。

（４）松村みね子研究への貢献：

松村みね子とは、歌人片山廣子（1878-1957）が主に海外作品の翻訳をするときに用いた筆名である。松村はアイルランド文学の翻訳家として名高いが、その訳業のなかで日本において最も人口に膾炙しているのは、（１）の項目でも述べた、スコットランドの作家フィオナ・マクラウドの作品の翻訳である。あざらし女の民話の文芸作品への取り込みとその世界への拡散を研究する過程で、松村みね子の訳業に関する先行研究の書誌情報に、じゃっかんの誤りや不明確な

部分があることがわかり、事項によってはそれらについてはっきりした修正点や答えを得るにいたった。それらをまとめたのが、研究ノート「松村みね子翻訳のフィオナ・マクラウド作品を研究するにあたっての留意点」、『主流』(同志社大学英文学会)、No. 72、2010、pp. 51-62 である。

この研究成果においてはその他に、松村みね子による英語あるいはゲール語の固有名詞のカタカナ表記の特徴なども指摘し、今後松村みね子の訳業について研究する場合の基本的前提を明確に示した。

（5）ジェイムズ・ジョイス研究への貢献：

アイルランドを代表する作家ジェイムズ・ジョイス(James Joyce 1882-1941)がイタリアの新聞に、アイルランドの西方にあるアラン島への探訪についてイタリアの新聞に寄稿したエッセイ"The Mirage of the Fisherman of Aran"がある。そのエッセイにはアイルランドの西方にあるとされた幻の島、ハイブラジルの伝説の影響が色濃いことが、アイルランド民話に関わる言説の世界への拡散の過程について調査するうちにわかった。民話が現地を離れて外国に散種される過程を示すこの研究成果は、平成 23 年 6 月 18 日に京都ノートルダム女子大学で開催された 2011 年度日本ジェイムズ・ジョイス協会大会におけるシンポジウム「To the West!--ジョイスとアメリカ」における発表の一つ、「アラン島の漁師が見た幻」: ハイブラジルからアメリカへ」で発表した。ジョイス研究の枠内から発想された研究ではなかったために、結果的、にジョイス研究の専門家にとっては目新しい情報の提供につながった。発表内容の要旨は、平成 24 年に出版される学会誌、*Joycean Japan* 第 23 号に掲載予定である。

（6）日本、アイルランド、英国をつなぐ研究者連携の広がり：

外国文学研究は往々にして一つの国家や地域の枠組みのなかで完結しがちであるが、本研究では国や地域の境界線にとらわれることなく存在する民話を扱ったがゆえに、専門であるアイルランド文学を越えた分野にも研究の目を向けることになった。この研究に機を合わせるかのように、英国のアイルランド研究学会 North East Irish Culture Network がスコットランド文学の研究団体との連携を強化し、アイルランドとスコットランドの間の文化的なつながりをテーマとした大会を開催した。本研究代表者は、第 8 回 North East Irish Culture Network 大会、（平成 22 年 11 月 13 日英国サンダーランド大学にて)、第 9 回 North East Irish Culture Network 大会（平成 23 年 11 月 12 日英国サンダーランド大学にて）で研究発表をすることにより、海外のスコットランド文学の研究者と親交を深め、現在の研究の連携につながっている。

これらの学会発表をきっかけに国内のスコットランド文学研究者との交流を開始し、現在は日本カレドニア学会から、有元志保『男と女を生きた作家：ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの生涯と作品』(国書刊行会）の書評を依頼されている。（『CALEDONIA』40、平成 24 年 9 月発刊予定。）

また、本研究の成果と趣旨が理解された結果、平成 23 年 8 月 29 日～9 月 21 日にアイルランド国立ゴールウェイ大学の Centre for Irish Studies に客員研究者として受け入れられ、研究成果をあげるとともに、現地研究者と交流を深めた。滞在の様子は、下記〔その他〕の項目であげたウェブ上にある Centre のニューズレターに寄稿した文書で知ることができる。また、Centre の 2012 年度版学生募集用パンフレットにおいては、2011 年度に Centre を訪れた"Distinguished Visiting Scholars"の一人として写真入りで紹介をしていただいた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Masaya Shimokusu, Defining Mermaids: Irish Seal Woman Folk Tales, the Mermaid Poems of Seamus Heaney and Nuala Ní Dhomhnaill, and their Translation, *Doshisha Literature*, 査読有, Nos. 54 & 55, 2012, pp. 1-20.

② 下楠昌哉、松村みね子翻訳のフィオナ・マクラウド作品を研究するにあたっての留意点、主流（同志社大学英文学会)、査読有、No. 72、2010、pp. 51-62. （研究ノート）

③ Masaya Shimokusu, Selkies in Orkney: Storytelling and the Literary Imagination, *Doshisha Literature*, Nos. 52 & 53, 査読有, 2010, pp. 97-114. （研究ノート）

＊*Doshisha Literature* の全文は、順次 CiNii（NII 論文情報ナビゲータ［サイニィ］）で読めるようになってゆく予定。

〔学会発表〕（計 4 件）

① 下楠昌哉、An Irish "Selkie": Robin Robertson's "Selkie" Dedicated to

Michael Donaghy、第 9 回 North East Irish Culture Network 大会、2011 年 11 月 12 日、サンダーランド大学（英国）。

② 下楠昌哉、「アラン島の漁師が見た幻」：ハイブラジルからアメリカへ、シンポジウム「To the West!--ジョイスとアメリカ」、2011 年日本ジェイムズ・ジョイス協会大会、2011 年 6 月 18 日、京都ノートルダム女子大学。

③ 下楠昌哉、Mineko Matsumura: A Famous Translator of Irish or "Celtic" Literature、第 8 回 North East Irish Culture Network 大会、2010 年 11 月 13 日、サンダーランド大学（英国）。

④ 下楠昌哉、"Selkies" in Mineko Matsumura's Translation of Fiona Macleod: Connecting Ireland, Scotland and Japan、The 2009 International Association for the Study of Irish Literatures Conference、2009 年 7 月 28 日、グラスゴー大学（英国）。

〔その他〕

ニューズレター

① Masaya Shimokusu. "Letter from Japan." Features. *Centre for Irish Studies Newsletter* 12 (Winter 2011). Centre for Irish Studies, National University of Ireland Galway. Web. 13 Feb. 2012.

６．研究組織

(1) 研究代表者

下楠昌哉（SHIMOKUSU MASAYA）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：90329532